

<被表彰者の功績概要>

(1) 教職員

① 野上 正師（多気郡多気町松阪市学校組合立多気中学校 指導教諭）

平成 20 年 4 月に多気郡明和町立明和中学校へ採用されて以来、美術科教育の専門性をいかしつつ、新しい取組にも積極的に挑戦する行動力、企画力、実践力を發揮してきた。生徒、保護者、地域、同僚教職員から厚い信頼を寄せられている。

平成 25 年 4 月に着任した多気郡多気町松阪市学校組合立多気中学校では、令和 3 年度から始まる C S （学校運営協議会）の担当として、円滑な運営開始に繋げられるよう、総合的な学習の時間を中心とした生徒の学習活動と地域の活動をつなげる基盤を令和 2 年度までに整えた。地元の名産である「前川次郎柿」を育てる J A 多気の柿部会や佐奈川を美しくする会、地元ゆかりの食品卸売り大手「国分」（東京）のグループ会社「国分中部」など、地域資源や特色をいかした活動を行う事業所と学校との連絡・調整にすすんで取り組み、生徒の学習活動につながる素地を見出した。

C S の運営が開始されてからは、その素地をもとに地域資源や特色をいかした地域学習の充実に精力的に取り組んだ。校区を通る伊勢街道や校区ゆかりの松阪商人「国分家」の歴史について生徒が学ぶ地元の語り部による講演会の実施、「前川次郎柿」の収穫体験をもとに、出荷できない柿の有効活用について生徒に考えさせる活動、商品開発や流通の仕組みについて生徒が学ぶ「国分中部」による出前授業などを通して、生徒に探究する力をつけるべく尽力した。さらに、傷が入って出荷できない柿の有効活用方法を考える中で、多気中学校と三重県立相可高等学校食物調理科、地元企業と「国分中部」が一体となって、カステラ菓子「柿シベリア」が商品開発されることにつながった。その中で、生徒はパッケージやキャラクターのイラストを考案し、販売促進の一翼を担った。そして、「柿シベリア」に次ぐ新商品として開発された「前川次郎柿プリン」の販売においても、有志メンバーと室長会が主体的に商品の P R に取り組む「柿プリンプロジェクトチーム」を発足させ、店頭の P O P 作りや商品の P R 方法を考えることに関わるなど、生徒が自ら考え、行動することに結び付いた。

これらの取組を経て、生徒が地域を大切に思うことや地域の一員としてできることを考えて行動することにつながっている。また、地域でも商工会や多気町役場が職業体験の受け入れ先を募ってくれるなど、多気地域の活性化に寄与している。その C S での協働体制をすすめた立役者の一人として、地域、保護者から高い評価を得ている。

② 中津畑 貴利（紀北町立潮南中学校 指導教諭）

平成 23 年 4 月、多気郡明和町立明和中学校教諭として採用されて以来、人権教育を基盤とした生徒理解に基づく授業実践、生徒指導、部活動指導などに尽力してきた。生徒一人ひとりの意見や行動を尊重し、公正かつ誠実な対応を重ねることで、生徒や保護者からの信頼を厚くしている。教育課題にも真摯に向き合い、目指す生徒・学校像の実現に大きく貢献している。

平成 26 年 4 月に着任した紀北町立紀北中学校では、「中学生が性的マイノリティについて考え、学ぶことは、多様性への理解と尊重を醸成する上で重要な一環である」との信念のもと、異なる性的指向や性自認を理解し、ちがいを当然のこととして受け入れられる態度を養うことで、差別や偏見に対して「おかしい」と思える力、立ち向かおうとする力の育成めざして、人権教育に取り組んだ。特に、L G B T Q 等をテーマにした授業では、生徒が主体となって映像を制作し、文化祭で人権劇として上映するなど、学びを発信する機会を創出した。この劇を鑑賞していた全校生徒の人権意識を高めることのみならず、保護者や地域住民の間でも高い評価を得て、人権意識の啓発に貢献した。さらに、その劇は近隣の小中学校においても教材として活用されるなど、紀北町内の児童生徒の人権意識向上にも寄与した。

令和4年4月に着任した紀北町立潮南中学校でも、紀北町の全教職員を対象にした人権教育授業公開にて、LGBTQ等をテーマに「性の多様性から学ぶ」と題した研究授業を率先して発表した。事後研修会では、この取組に当たってのすすめ方や思い、その際の留意点などが議題になるなど、経験年数の浅い教職員のみならず、紀北町内すべての教職員の学びにつながり、資質向上に大きく貢献している。

また、どの学校においても、社会科担当の教師として、身分制度等の歴史的内容の学習を進める際に差別を許さないという強い熱意をもって授業に臨み、生徒の心に響く人権教育の実践に努めている。

これまでに培ってきた人権感覚をもとに、生徒指導主任として家庭訪問等を通じて保護者との連携を深めながら、家庭環境や友人関係に悩む生徒や不登校傾向のある生徒に親身になって寄り添い関わっている。一方、問題行動に対しては毅然とした態度で指導するなど、生徒が安心して学校生活をおくれるように模索する姿は、他の教職員にとって模範となっている。

さらに、令和7年4月からは指導教諭となり、人権教育だけでなく、研修のリーダーとして、学力向上に向けた授業改善や学級経営のあり方等、教員の指導力向上や生徒指導体制の充実に貢献している。

③ 細野 歩（三重県立四日市農芸高等学校 教諭）

平成19年4月に、本県高等学校教諭として採用以来、それぞれの勤務校において家庭科教諭として教科指導力の向上に努めてきた。

特に、三重県立四日市農芸高等学校では、平成26年度から家庭科主任として、ユマニテク調理製菓専門学校通信制課程と連携した製菓衛生師資格の取得、製菓衛生コース2年生を対象とした地元製菓店へのインターンシップの実施、企業と連携した外部講師による実演講座の実施等を主導し、生徒の知識・技術の向上等に大きく寄与するとともに、製菓店への就職を希望する生徒の進路実現につなげた。

令和7年7月31日、8月1日に開催された「第73回全国高等学校家庭クラブ研究発表大会三重大会」では大会事務局長として、企画・調整・運営において、中心的役割を担った。三重大会は39年ぶり2回目の開催であり、約1,000人の全国のクラブ員が一堂に会し、家庭クラブ活動の集大成として、日頃の実践研究成果の発表や情報交換を行い、広く全国につながる連帯感のもとに会員相互に研鑽を積むことを通じて、家庭生活並びに地域社会の向上発展に貢献した。

加えて、大会生徒実行委員長である同校生徒を指導し、開会式における本県代表のあいさつをはじめとする大会運営のリーダーを育成するとともに、生徒実行委員会において本県と全国の高校生とが活発に情報交換する等、生徒間の交流も主導した。これらのことにより、生徒の主体性を重んじた家庭科教育の充実・発展に寄与した。

以上の実績により、同教諭は、本県及び全国の家庭科教育の充実・発展に寄与している。

④ 下條 博之（三重県立四日市高等学校 教諭）

平成21年4月に、本県高等学校教諭として採用以来、それぞれの勤務校において、国語科教諭として教科指導力の向上に努めるとともに、学習の素地となる生徒の意欲・態度の育成を図り、他の教職員の模範となる丁寧な指導に取り組んできた。

特に、三重県立四日市高等学校では、平成28年度から学級担任、令和4年度から学年主任、令和7年度からは進路指導主事を務める間、1学年後期以降は、数学や国語の問題集、英単語の書き取りなど知識を問う内容について反復練習が必要な課題の提出は義務づけないなど、生徒の主体的な学習態度を育成する手法の研究開発に取り組み、同校の「自律した学習者の育成」をリードしてきた。結果として、同校生徒の学習意欲・活動意欲は向上し、生徒が学習に前向きに取り組むようになり、生徒の希望する進路実現につながった。

また、県立高等学校の大学進学希望者を対象に、学校間の垣根を越えて互いに学び合い、主体的な学習意欲を育むための講座として、県教育委員会が主催する「進学対策H Y P E R講座」の講師を務め、難関大学において求められる力を育成するとともに、この取組等を通して、県内教員の教科指導力向上にも寄与した。

さらに、教科指導においては、国立文化財機構文化財活用センターとキヤノン株式会社の共同プロジェクトで制作したびょうぶや掛け軸を通じて学ぶ授業を開催し、びょうぶに描かれた場面と「源氏物語」を関連づけて解説する等、生徒の興味・関心を喚起する取組を行った。

同教諭の指導を受けた同校の生徒は、様々な活動に主体的に挑戦するようになり、中学生から大学生までを対象とした金融・経済学習コンテストである「第 24 回日経 S T O C K リーグ」(2023 年度) における最優秀賞受賞、「第 23 回日本再生医療学会中高生のためのセッション」(2023 年度) における金賞受賞など、多様な分野で優秀な成果を収めるようになった。毎年多くの学校からの視察を受け入れることにもつながっており、これらの取組は全国でも注目されている。

以上をはじめとして、同教諭の同校及び本県の高等学校における学習指導に非常に大きな役割を担い、本県教育活動の充実・発展に寄与している。

⑤ 西岡 宏起（三重県立相可高等学校 教諭）

令和 3 年 4 月 1 日より三重県立相可高等学校の教諭として採用され、食物調理科教諭として調理に関する専門的技術と教育にかける情熱を常に持ち、生徒に接している。

地域の料理教室やイベントへ生徒とともに積極的に参加し、食を通じた地域と学校との交流を行うことにより地域の食のリーダー育成に熱心に取り組んでいる。令和 3 年度に開催予定であった「三重とこわか国体」では、式典の際に参加者に提供する式典弁当の創作を担当した。新型コロナウイルス感染症の急激な感染拡大等により、「三重とこわか国体」が中止されたため、弁当の提供は叶わなかったものの、献立を考案・調製し、県産食材の活用による三重の食の魅力発信に寄与した。令和 5 年度には、「G 7 国土交通大臣会合歓迎パーティー」に同教諭の指導のもと、同校食物調理科生徒による三重県産食材をふんだんに使った料理は、各大臣から好評を博した。令和 7 年 11 月、本県で実施予定の「全国豊かな海づくり大会」では、大会記念弁当を監修し、提供した。

また、大韓民国の「韓国国際調理高等学校」、「韓国調理科学高等学校」、台湾の「開平餐飲學校」との交流において、相手校への訪問時には、相手校生徒へ日本料理を指導し、調理を通した国際交流を推進している。

さらに、地元自治体や企業と連携し、地元特産品を用いた商品や調理方法の開発、実習研修施設として高校生が経営する「まごの店」の運営、指導など、地域に根ざした実践的企業教育にも力を注いでいる。

同教諭の指導を受けた同科の生徒は「全国高校生ガストロノミー甲子園 2024」優勝、「全日本高校生W A S H O K U グランプリ 2025」優勝をはじめとして、毎年数多くの全国料理コンクールにおいて優秀な成績を残している。同科の生徒は、こうした取り組みを通して、食に関する高度な知識、技術を習得したうえで、日本全国の料亭等に就職したり、地元で飲食店を開業したり、様々な食の分野で活躍している。

以上の実績により、同教諭は、地域との連携・協働を通し、同校及び地域の活性化に非常に大きな役割を果たすとともに、本県教育活動の充実・発展に寄与している。

(主な全国料理コンクールの成績)

○「全日本高校生W A S H O K U グランプリ」(主催：金沢市、全国高校生 W A S H O K U グランプリ開催委員会。決勝大会は例年 8 月に開催。)

2022 年、2023 年、2025 年優勝。2024 年準優勝

○「全国高校生ガストロノミー甲子園」(主催：全国高校生ガストロノミー甲子園実行委員

会（多気町、三重テレビ放送株式会社、ヴィソン多気株式会社）

2024年優勝、2025年準優勝

⑥ 神田橋 純（三重高等学校 教諭）

三重高校は、「知・体・徳」のバランスのとれた人間形成を目指すことを意味する「真剣味」を校訓とし、「学術とスポーツの真剣味の殿堂たれ」を建学の精神として掲げ、熱意をもって学び続けること、心身を鍛えるとともに夢と向上心をもって物事に挑戦することを大切にする中学校・高等学校である。

同人は、2014年、三重高等学校に情報科の教諭として奉職。熱心でわかりやすい教科指導には定評があり、生徒の人気も高い。

一方、同人は三重高等学校に生徒として在学中、ダンスに関心を持ち「ダンス同好会」を結成するに至った。ダンス同好会は、同人が卒業後も活動を続け、同人が教師として同校に戻ってからは、同人の熱意ある指導及び同人の多方面への働きかけにより「ダンス部」に昇格することとなった。同人は中学校ダンス部、高等学校ダンス部と分けて設立し、ダンスを通じて、生徒に、自己を表現する楽しさ、難しさだけでなく、規律や礼儀、チームワークの大切さ、仲間や他チームへの敬意・尊重、自己肯定感の養成など一人の人間としての基本についても教授し、生徒一人ひとりが最大限に輝くよう日々熱心な指導を重ねた。皆が心を重ね一つのダンスを創り上げ、一人ひとりが輝く。同人の指導方針はまさに建学の精神に基づく、三重高校の四大綱に沿うものであり、その精神を具現化するとともに、生徒の成長を支え促進するものである。

その結果、中学校ダンス部は創部3年目で全国優勝（文部科学大臣賞）、高校ダンス部も創部3年目で全国優勝という大きな成果を挙げることとなった。

また、数々の全国大会で優秀な成績を収めるだけでなく、キレがあり、生徒が活き活きと踊るダンスは、老若男女を問わず、地域でも親しまれ、非常に人気がある。地域からの依頼に応じてダンスを披露するなど地域社会とも積極的に交流し、地域活動の活性化に貢献している。

そういった取組により、三重高のダンスは多くの人に親しまれ、その心に感動を呼び、現在では部員数約200名の大規模クラブに成長した。三重高のダンスに魅せられたアーティストのバックダンサーやテレビ出演等の依頼も多く、年間100ステージもの出演をする日本一イベントに出演するダンス部となった。同人は部活を指導するだけでなく、生徒の学習についても配慮し、勉強と部活動の両立にも尽力している。こういった同人や生徒の努力、その成果としての活躍は、ダンス部生徒だけでなく全校の生徒や教職員にとっても誇りとなっている。

同校のダンス部は、入部時の約6割が初心者であることが特徴の一つである。強豪校はプロダンサーを外部コーチとして雇っていることが多いが、同校は同人の指導方針により、生徒の創造性を育成し、その能力と個性を活かすため、プロダンサーのコーチを依頼せず、生徒主体で作品を創り上げている。また、ダンスのみでなく、舞台運営をサポートする役割も生徒が担っており、裏方の仕事も含めて一つの舞台を部員全員が役割分担し、協力して創り上げていく。その教育姿勢は、生徒の自主性や社会性をはじめ、多様な能力、視点を大きく成長させるものであり、部員からはもちろんのこと、在校生や卒業生、保護者からも共感を呼び、大きな信頼を得ている。こういった活動はダンス関係者も注目し、生徒達がAKB48の楽曲の振付やタイのアイドルグループBNK48の振付を担当したりするなど、同人は生徒自身の自信と誇りにつながる機会を数多くつくり、その活躍を後押しし、生徒の成長を支えている。こういった同人の活動は同校の教職員全体にさらに大きな活気を呼び、また同校の活躍により、県内では公立高校においてもダンス部を設立し、生徒が主体的に活動する学校が増えている。

(2) 教職員組織

① いなべ市立石榑小学校

同校は、平成 28 年度から令和 6 年度にかけて三重県の「わかる授業促進事業」等を活用して、効果的な少人数指導や I C T の活用について研究・実践してきた。

児童・保護者の希望や既習内容の理解状況の把握に努めた上で、習熟度別に 3 つのクラス（基礎基本・標準・発展）に分けて授業を行う際、児童の実態に応じた指導方法の工夫を図り、算数科における効果的な少人数指導の研究を進めて成果を上げている。令和 3 年度以降は、オープンな教室構造を活かし、教員がいつでも授業を参観できる研修体制を整え、授業改善の推進力を高めた。また、少人数授業においては、担当者間で児童の理解度や授業の様子などを常に共有し、指導の一貫性と質の向上を図っている。さらに、休み時間に算数脳トレを実施し、算数への興味や親しみを持つ児童が増加するなど、学習意欲の向上にもつなげている。

令和 4 年 10 月には、いなべ市小中一貫に係る校区研修において、「思考力・判断力・表現力」を高める授業づくりをテーマに、第 6 学年算数の少人数授業の提案授業を行った。児童の習熟度に合わせて指導方法を工夫し、自他の思考の比較や考えを再構築する際に I C T 機器を積極的に活用する授業展開を提案した。実践を通して、指導方法の工夫や I C T の効果的な活用についての気づきや学びを、校区内の小中学校で共有することができた。

令和 5 年 9 月には、いなべ市教育研究指定校委託事業を活用して大安中学校区の小中一貫教育研究発表会を開催し、いなべ市内の小中学校教職員、および市外の参観希望教職員を対象に第 6 学年算数の少人数授業の授業提案を行った。事後検討会で児童の実態に合わせた指導方法・授業展開について協議を行った結果、石榑小学校の少人数授業の実践の取組が市内の小中学校でも取り入れられるなど、効果的な少人数指導のモデル校として大きな役割を果たしている。

その取組の成果は、三重県が独自で行っている学力調査にも表れており、特に算数の「図形」と「割合」の領域において、令和 3 年度は平均正答率をより下回る設問が半数以上だったが、令和 6 年度はほとんどの設問において平均正答率を上回る（プラス 30% 以上になる設問もあった）など、大きく状況が改善された。また、授業改善に伴い、授業評価アンケートでも肯定的回答が増加するなど、児童の学びの質が向上したことが確認されている。

このように同校は、9 年間にわたり効果的な少人数指導や I C T 活用について研究・実践を積み重ね、学力向上と授業改善の両面で着実な成果を上げていることから、十分に推薦に値する学校であるとして高く評価できる。